

『安嘉門院四条五百首』試訳 その一・春部

田 辺 麻 友 美

『安嘉門院四条五百首』とは、安嘉門院四条（通称・阿仏尼）が、弘安三（一二八〇）年から弘安五（一二八二）年までの間に、亡夫為家の正妻の息子、為氏との間の細川莊をめぐる争いのさなか、訴訟での勝訴を願いつつ、関東の五社に百首ずつ奉納した和歌である。この『安嘉門院四条五百首』（以下、『五百首』）は島原松平文庫に眠っていたものを島津忠夫氏が発見され、紹介されたという経緯がある。その後、稲田利徳氏によつて、薬師寺にも伝本があることが明らかになった。そして、冷泉家にも伝本が存在することがわかつている。（現時点では未刊行）。既に筆者はこの『五百首』の内容に関して、若干の考察を試みたことがあるが、その際、実はこの『五百首』は、為家の祖父俊成、および為家の『五社百首』（為家は実際は七社への奉納）を意識して詠まれた歌で、十の神社に百首ずつの和歌を奉納したものであることも論じた。成立状況などに関して、そちらをご参照されたい。また、この『五百首』に關しては、他の研究者によつても研究がなされている。しかし、今までに内容に關してのご論考はあつても、全五百首に対しての訳はなかつたので、今回筆者が試みた次第である。

『五百首』は『堀河百首』題に従つて詠まれているが、今回は、歌題別に分類した上で、四季部のうち、春部に属するもの、及び、『五百首』の前に付された、稻荷社への百首の試訳を記したい。筆者はこの『五百首』に關し、題詠歌である以上、社別に検討することもできることながら、歌題別に検討することも重要であると考えたため、このような形で発表することにした次第である。

まだまだ至らぬ点、検討しなければならぬ点もあるかと思う。今回公表することで、多くのご教示をちょうだいできれば幸いである。また、今後稿を改めて、夏部以降も発表していきたいと考えている。

（凡例）

○『安嘉門院四条五百首』を歌題ごとに並べ替え、和歌の次に訳を記した。

○和歌の先頭に記号を付し、各社を識別するものとした。各記号と対応する社名は以下の通りである。●…稻荷 □…今熊野 △…えがら ▽…新賀茂 ▲…新日吉 ▼…鹿嶋。

○表記は、『松平文庫影印叢書 第十六卷』（新興社）を元にし、濁点・送り仮名などは私に付した。その際踊り字は正字に直した。また、訳の後ろにある※以下の注記は、その和歌の参考歌もしくは本歌と思われるもの、あるいは、特に注記した内容である。引用した和歌は、『新編国歌大観』（角川書店）によった。ただし『万葉集』の歌番号は、旧『国歌大観』に従った。

『安嘉門院四条五百首』（稻荷）

「田家」

●むすびをく露もたまらであれにけりおばなこひしをだのかり庵

その上に結んで置いた露もたまることなくもれて、荒れてしまった。尾花が囲んだ田の仮庵は。

「懐旧」

●しのばじと思ひかへすもかへらねばあやにくにただむかしこひつつ

昔を慕うまいと思ひ返しても、過去は帰ってこないの、ただむやみに、繰り返し昔を恋しく思う。

「夢」

●とりかさねうつつともなき身のうさをなぐさむことは思ひ寝のゆめ

重ねて起こる、うつつとも思われない身のつらさを慰めることは、思いながら寝て見る夢である。

「無常」

●よしやただ夕べの空のうき雲に山かぜはやくうつりゆくよええ、ままよ。ただ夕方の空の浮き雲に山風が早く吹いて、

雲が移りゆくように、はやく移りゆくこの世に身を任せよう。

「述懐」

●あるまに思ふ心をかたりなば誰もなみだをおしみやはせむもしも私があるがままに思う心を語ったならば、誰も同情の涙を惜しみはしないだろう。

「祝」

●君が代を神の久しくまればやほとけの法も光つきせぬわが君の御代を、神が長いことお守りになられるので、仏法の光もつきることはないでしょう。

春「立春」

□（今熊野）きのくにやゆらのうら風しづかにて霞むみなとに春立ちにけり

紀の国の由良の浦には浦風も静かに、霞む湊には春がやってきた。

△（えがら）あきらけき春まちえたる空なれば人の心もいかがくもらん

待つていて、曇りのない春の空になったので、人の心もどうして曇ることがあるうか（いいえ、あるまい）。

▽（新賀茂）山風にこほりとけゆくきぶね河いはなみはやく春立ちにけり

山風で、氷が融けてゆく貴船川の、岩に当たってくだける波も早く流れ、早くも春が訪れていることだ。

▲（新日吉）出づる日のかげやますみのかがみ山みやこにむか

ふ春のひかりに

山から出る日の影が、鏡山にさしている。まるで都に向かう春の光のように。

▼（鹿嶋）春はきぬむすぶこほりもいまはただとけねかしまのみたらしの水

春は来た。固く氷りついていた鹿嶋神宮の御手洗の水も、手にすくえるように今はただとけてほしい。

「子日」

□もう人も君をぞ祈る春ごとに松のねのひの千代をかさねて多くの人も、わが君の千代をお祈りしております。春ごとに、根引きする子の日の松の千代を重ねて。

△何をかは引くらぶべきちはやぶる神のねの日の松のためしに何を他に比較することができましようか（いいえ、できません）。神代から続く御代の、子の日の小松がときわに栄える例には。

▽神のますむかひのをかのこまつばらひかねどけふのねのひをぞしる

神のおいでになる、向かいの丘の小松原は、引かなくても今日の子の日を知っている。

▲ひかずともちよの子の日の色まされ神のみかきの春のわか松引かなくても、千代を祈る子の日には、色が増しなさい。神の御垣の春の若松よ。

▼かぎりなくおもふも久しふたばなる松のねの日のゆくすゑの春

思うにつけ、限りなく久しいよ。子の日双葉の松が生いゆ

く将来の春を。

※二人の息子（為相・為守）の行く末を案じている。

「霞」

□遠近の山もさながらみえわかでひとつ空なる朝霞かな遠くや近くの山も、そのまま一緒になって見分けることができず、一つの空に見える朝霞よ。

△ゆたかなる霞の袖のしたにこそ春しらぬ身もはぐくまるらめ豊かに広い霞の袖の下には、春を知らない不遇な身も、育てられることだろう。

※為相と為守が、父親の愛は知らなくても、先祖代々の恩寵の下に育つことを暗示している。

▽かすみこそそのにも山にもかかりけれ春の衣のたもとゆたかに霞が、野にも山にもかかっている。春の衣の袂が豊かである様子で。

※「はるのきるかすみの衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ」（『古今集』春上・二三・題しらず・在原行平）

「うれしきをなにつつまむ唐衣たもとゆたかにたてといはましを」（『古今集』雑上・八六五・題しらず・よみ人しらず）

▲たつとみるはじめもはてもひとつにてよもの雲ゐはかすみ也けり

立つと見えた、はじめの方も終わりの方も一つになっていて、四方の雲居は一面の霞だなあ。

▼うらの名もおなじかすみのいく春かなみにかさねて立ちわた

るらん

浦の名前も、同じ霞という霞ヶ浦では、いったい幾度の春に波を重ねて霞は立ち続けるのだろうか。

「鶯」

□むかしより心長くぞおとづる春はかならずうぐひすの声
春には必ず鶯の声が、昔から気長に訪れるよ。

※「としふればあれのみまさるやどのうちにこそろながくもすめる月かな」〔後拾遺集〕雑一・八三二・題しらず・善滋為政

「みし人もわすれのみゆくふるさとに心ながくもきたるはるかな」〔後拾遺集〕雑三・一〇三四・法師になりてすみはべりけるところにさくらのさきて侍りけるを見て・前中納言義懷

△くる春も谷のとよりやいでつらんしるべ顔なるうぐひすの声
来る春も、谷の戸から出たのだらうか。いかにも道案内といった様子の、鶯の声よ。

※「谷の戸を閉ぢや果てつる鶯の待つに寄せで春も過ぎぬる」〔拾遺集〕雑春・一〇六四・右衛門督公任こもりはべりける頃、四月一日に言ひつかはしける・藤原道長

「行きかへる今春をも知らず花さかぬみれ隠れの鶯の声」〔同・一〇六五・かへし・藤原公任〕

▽都より猶めづらしと聞こゆなりあづまの春のうぐひすの声
都よりもなお珍しいと聞こえるよ、東国の春の鶯の声は。

▲人聞けど思ひもわかじ春くれば只おのづからうぐひすの声
他人が聞いても、区別できないだろう。春がくれば、ただ自

然と鶯の声がするとばかり聞える。

▼ちはやぶるみむろの竹をふるすにて神にこもれるうぐひすの声

三室山の竹を古巢にして、神のもとにこもつていた鶯の声よ。

「若菜」

□春きてはみなわかなにぞ成にける雪いだきしおきな草まで
春が来て、野は皆若菜になった。白髪頭の翁のような、雪を頭にいただいた翁草までもが。

※「残りゐて霜をいたたく翁草冬の野守となりやしぬらん」〔六百番歌合〕冬上・五〇七・顕昭

△里遠き山のさはだも春くれば人かげ見えて若なつみけり
里が遠い、山の沢にある田にも春が来たので、人影が見えて若菜を摘んでいる。

▽春日さす山のをのへのふるはたにめぐむわかなをつむやさ
人

春の日が射す山の尾上の古い畑に、恵みとして萌え出た若菜を里人は摘むのだらうか。

▲おりたたばもすそぬるともけふこそは若菜につまめ沢のねぜり

降り立ったならば、裾は濡れても、今日こそ沢の根芹を若菜として摘もう。

▼春たちてなぬかのうらのいそなをやわかなになしてあさはつむらん

春になって、七日目の浦の磯の海藻を、若菜として今朝は摘んでいるのだらう。

※「こよろぎのいそたちならしいそなつむめざしぬらすな
おきにをれ浪」〔古今集〕東歌・一〇九四・さがみう
た)

「残雪」

□ふりつみし雪をさながらけちもせでいやたかまれる春の山か
げ
降り積んだ雪をそのまま消しもしないで、いよいよ高くなる
春の山の姿よ。

※「ふりつみし高ねのみ雪とけにけり清滝川の水の白浪」

〔西行法師家集〕一

△いと寒しみ山の里は春とだにまだ白雪の松にかかりて

たいへん寒い。深山の里は春であるときえいつても、まだ知
らないかのように白雪が松にかかっている。

▽春なれば峯はさながら霞にてふもとを冬と消えぬ雪かな
春なので、峯は一面霞んでいて、麓はまだ冬と見なして消え
ない雪だなあ。

▲かげろふのくさのみどりにもゆる迄冬をおしみてのこる白雪
かげろふが、緑にもえる草の色に立つ頃まで、冬を惜しんで
残る白雪よ。

▼今もなを冬の日数ののこるかときゆる物からはるのあは雪
今もなお、冬の日数が残っているかと、空気が冴えるものの
春の淡雪が降る。

「梅」

□おぼろなる月さへそらににほひけり梅さきぬらし山のしたか
ぜ

おぼろに見える月さえも、空に良い香りを漂わせている。梅
が咲いているらしい、山の下を吹く風がその香りを運んでく
る。

△こち風の吹きをくりける梅の花八重のしほちの跡もなつかし
東風の吹き送ってきた梅の花よ。八重の潮路の跡も慕わしい。

※「こちふかばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春を
わするな」〔拾遺集〕雑春・一〇〇六・ながされ侍りけ
る時、家のむめの花を見侍りて・菅原道真

▽かたしきの袖はこほれど春風にちりすぎにける梅がかぞする
片敷く私の袖は涙で凍っているが、春風で散り過ぎていった
梅の香りがする。

※「片敷きの衣の袖はこほりつついかですぐさむとくる春
まで」〔後拾遺集〕恋三・七二一・橘則光朝臣陸奥のか
みにてはべりけるに、おくこほりにまかりいるとて春な
む帰るべきと言ひはべりければ女のよめる・光朝法師
母)

▲おぼろなる月もうつろふ梅がかのあたによおしきこけの袖か
な
もったいないことに、梅の香りがおぼろにかすむ月もうつる
私の苔の衣に移って。

※「あたら夜の月と花とをおなじくはあはれしれらん人に
見せばや」〔後撰集〕春下・一〇三・月のおもしろかり
ける夜、はなを見て・源信明

▼身にしめつこのよにかかるはなの香はむめならで又たくひな
ければ

この身にしみさせたよ、この世にこのような花の香りは梅ではなくて他に比べるものがないので。

「柳」

□朝ごとの露のしら玉かずかずむすびとめたる青柳のいと朝ごとにおく、露の白玉を数多く結んで留めている青柳の糸よ。

△かはみづのにごらぬよをや頼らんくち木の柳かげをはちても

川の水の濁らないように正しい政道の行なわれる世を頼みにしようか。朽ちた木の柳のような私は、影を恥ずかしいと思いがらも。

※「みちのべのくち木の柳春くればあはれ昔と忍ばれぞする」(『新古今集』雑上・一四四九・柳を・菅原道真)

▽つきもせずただくりいだすいととかみどりの柳春をへぬらん

尽きもせずに、ただ繰り出す糸ということなのか。緑の柳が、春を幾度も経て新芽が出ている。

▲見わたせばよものこずゑにさきだちてそむるみどりや春の青柳

見渡せば、四方の梢に先立つて染める緑なのか、春の青柳は。君が代に草木もさこそなびけとや風にしたがふ春の青柳

わが君の御代に、草木も人と同じようになびけというのか、風に従ってなびく春の青柳よ。

「早蕨」

□山ふかみおどろをかざす下わらびかくろへてこそ春を知りけ

れ

山が深いので、深いいばら道に生える下蕨は、隠れてこそ、春の訪れを知ったよ。

△くれかかる嶺のかすみのした蕨たどるたどるもおりてかへらん

暮れかかる嶺の霞の中で下蕨を折り、たどりたどりしながらも、山道を降りて帰ろう。

※「くれぬとて寝てゆくべくもあらなくにたどるたどるもかへるまされり」(『後撰集』恋二・六二八・人のもとにしはしばまりけれど、あひがたく侍りければ、物にかきつけ侍りける・在原業平)

「すみぞめのくらまの山にいる人はたどるたどるも帰りきななん」(『後撰集』恋四・八三二・淨蔵くらまの山へなんいるといへりければ・平中興女)

▽もえいづるのべのさわらび是までもわすれぬ春の形見にぞつむ

萌え出る野への早蕨を、これまでも、忘れない春の形見として摘む。

▲はる山の霞にもゆるさわらびはいづれけふりと誰かわきける春の山の霞に萌える早蕨は、どちらが本当の山焼きの煙だと誰が見分けることができるか(いいえ、できない)。

※「煙たちもゆとも見えぬ草の葉をたれかわらびとなづけそめけむ」(『古今集』物名・四五三・わらび・真静法師)

▼けぶりさへ跡なきおぎのやはらにひとりもえける初蕨かな

野焼きの煙さえも跡が見えない萩の焼け原に、一人で萌える
(燃える) 初蕨だなあ。

「桜」

□うらちかき松のうへこす白なみやはや咲きかかる桜なるらん
浦が近い松の上を越して行く白波は早くも咲きかかる桜な
だろうか。

△たぐひなき花のさかりのあらはれて雲に紛れぬ山桜かな
比類ない花の盛りが表れて、雲に紛れずに見える山桜である
ことよ。

▽いつよりも猶さきまされ山ざくら宮このつとに行きてかたら
ん

いつの年よりもなお一層咲きまされ、山桜よ。都への土産話
として、都へ行って語ろう。

▲あづまにも花の所はかはらねばただこのほどの都わする
東国でも花の咲く所は変わらないので、花の美しく咲くあい
だは都のことを忘れていられる。

▼はるかなるなみちのすゑのしらくもほとをしまかけて花咲き
にけり

遙かな波路の末に白雲と見えるのは、あれは遠い島々にわた
って花が咲いているのだ。

「春雨」

□春雨も身のみふりそふ涙にてしくしく袖のぬれぬ日もなし
春雨も、身にのみ降り添う涙であつて、しくしくと袖の濡れ
ない日もない。

※「春雨のしくしくふればいな庭庭にみだるる青柳のい

と」(拾遺愚草「八)

△吹きはらふ風をこそまて春雨にぬれぎぬほさで雲かかれども
吹き払つてくれる風をこそ待とう。春雨に濡れる衣を干さな
いでいて、毎日雲がかかつていても(濡れ衣の汚名を晴らせ
ない雲がかかつていても)。

※「かきくらしことはふらなむ春雨にぬれぎぬきせて君を
とどめむ」(古今集「露旅・四〇二・題しらず・よみ人
しらず」阿仏陀の訴訟での勝訴を待つ心を暗示。

▽濡れて干す涙のひまもなき物をさのみやくもる春雨のそら
涙で濡れたのを干す暇もないものを、そのように曇るのか、
春雨の降る空は(また降るのか)。

▲つくづくとわがたび衣はる雨になみだをかけてほさぬ袖かな
つくづくと、我が旅衣は、春雨に更に涙をかけて、絶えず濡
れていて干さない袖であるなあとと思う。

▼春雨にぬれてぞおもふ心からよにふればこそ袖もしほるれ
春雨に濡れて思うよ。自分の心のせいで、世の中に長生きを
すればこそ、袖もしおれるような経験をすることだ。

「春駒」

□春駒のつなぎがたきもよそならずある心は身にもしられて
春駒の、繋ぎとめにくいものも他人ごとではなく感じられる。
春駒の荒れている心は、自分自身にとってもよくわかること
だ。

△尋ねばやかすみのうちに立ちかへりたなれのこまのゆくゑい
かにと

訪ねたいものだ。霞の内側に立ち返って、手に馴れた駒の行

方がどのようなのかと。

※為相と為守の成長ぶりが見たいという意味を暗示する。

▽さすが又もこし方にかへりけりしばしぞあるのべの春駒
やはり、またもと来た方向に帰っていったよ。しばしの間荒
れていた、野べの春駒は。

▲しばしとて立ちはなれても春駒のたなれし人をいかにこふら
ん

しばしの間と離れても、春駒は手馴れた人をどのように恋し
く思うのだろうか。

▼わが心よにつながれて離れぬはもどき顔なるのべのはる駒
私の心は世の中のしがらみに繋がれていて、離れないことに、
非難する顔をしている野べの春駒よ。

「帰雁」

□かへる雁もじも乱れぬひとつらを皆かきけつは霞なりけり
北へ帰る雁が、一文字も乱れぬように一列になって飛んでい
るが、それをすっかりかき（書き）消すのは霞であることよ。
△旅の空ひとりかなしき夕暮の涙にうきてかへるかり金

旅の空に、一人で哀しく夕暮れを、涙に浮いて飛んで帰る雁
よ。

※阿仏尼自身の姿を重ねる。

▽此春はいづれさきにと急ぐらん我は宮こにかりはこしちに
今年の春は、どちらが先に帰りを急ぐのだろうか。私は都に、
雁は越路にと。

※阿仏尼が帰京できるめどがたっていたことを示すか。

▲こし方に雲ゐる雁のかへるさをよそに見て春やくれなん

来た方向に、雲居の雁の帰るのを、私はいまだなお他人事に
見ていて、春が暮れていくのだろう。

▼したふともかひもあらじなへるよりかへる雲路もみやこな
らねば

雁を恋慕しても、甲斐もないだろうよ、帰るといっても雁
の帰る先は都ではないので。

「喚子鳥」

□花ちりて人めまれなるさびしきにわれをとづるよぶこどり
かな

花が散って、人目がまれになった寂しさから、私を訪れる呼
子鳥だなあ。

△しる人もあらばや誰をよぶこ鳥よぶとてもまたこたへしもせ
じ

知人がいればなあ、と、誰を呼ぶのか、呼子鳥よ。呼んでも
また答えもしないだろうが。

▽うかれきてたづきもしらぬわがためや人よぶこ鳥声たえずな
く

あてもなくやつて来て、手がかりもない私のためか、人を呼
ぶ呼子鳥が絶えず鳴いている。

※「をちこちのたつきもしらぬ山なかにおぼつかなくも呼

子鳥かな」『古今集』春上・二九・題しらず・よみ人し
らず）

▲はるかなるみ山隠れのよぶこ鳥あらしにつたふ声ぞさびしき
遥かな深い山に隠れる呼子鳥の、嵐を伝って聞こえる声が寂
しい。

▼よぶこ鳥よぶなる物をつれなくて立ちもかへらぬ春のやま人
呼子鳥が呼んでいるのに素っ気なくて、帰りもしない春の山
人よ。

「苗代」

□さぞかしなわしろ水にみしめ縄ひきひきかはる人のならひ
も

さぞや苗代は、水を占めることだ。縄を引くように、ひき代
わる人の世の慣わしでもわかる。

△さまざまに引きなすとてもよしやただなはしろみづによをば
まかせん

さまざまに水を引いて田を作るにしても、ええい、ただ、苗
代の水に世の中の流れを任せてみよう。

▽を山田のしめかけそめしわがかたになはしろ水や心ひくらん
小山田の注連縄をかけ始めた私のほうに、苗代の水は心引か
れるだろう。

※自分の訴訟での勝利を暗示する。

▲わすれめや志賀田のおものあぜつたひ苗代水をこえしゆきき
も

忘れようか、志賀田の水面のあぜを伝って、苗代の水を越え
て行き来したことを。

▼ひきひきに道こそかはれいづかたとなはしろ水はおもひわか
じを

水を引いて、また引いて、という苗代は、道と入れ替わって
ほしい。どちらか一方に、苗代水は思いをわけることができ
まいから。

「葦菜」

□いたづらにすみれさきそふ春の日も野をなつかしみつむ人
や
なき

無駄に葦が咲き競っている春の日も、野を慕わしく思つて、
摘む人はいない。

※「春の野にすみれつみにしこしわれぞ野をなつかしみひ
とよねにける」〔万葉集〕八・一四二四・山部赤人

「わが宿にすみれの花の多かれはきやどる人やあると待
つかな」

〔後撰集〕春下・八九・「荒れたるところにすみはべり
ける女、つれづれにおもほえ侍りければ、庭にあるすみ

れの花を摘みて言ひつかはしける」・よみ人知らず

△なにとわれかかるうき世にすみれ草つみえぬばかり物思ふら
む

なぜ私は、このような悩みの多い浮き世に住み、葦草を摘む
ことができない（罪を得る）ほどに物思いをするのだろうか。
▽ふる里はすみれしげりてあれぬともわれつみはやしゆきてこ
そみめ

古里は、たとえ葦が茂って荒れてしまつても、私が摘みたい
ので、行つてみたい。

▲かたしきの袂や花にすり衣すみれつむ野にひとよとまらば
一人で寝る衣の袂が花模様に摺られるだろうか、葦を摘む野
に、一夜泊まつたならば。

※「春の野にすみれつみにとこしわれぞ野をなつかしみひ
とよねにける」〔万葉集〕八・一四二四・山部赤人

「恋しくは下を思へ紫の根摺りの衣いろに出づなゆめ」〔古今集〕恋三・六五二・よみ人知らず

▼さく花の色もなつかしすみれ草むらさきおふるおなじのはらに

董は、咲く花の色もなつかしく思われる。紫が生えるこの同じ武蔵野の野原に。

※「紫のひとつとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」〔古今集〕雜上・八六七・よみ人知らず

「杜若」

□かきつばたあたりにしげるさわみづはそこさへ同じ花ぞうつろふ

杜若が周囲に繁る沢の水は、水底さえも同じ花が映るほど澄んでいる。

△あししげく雲もひまなき沢水をはなさへかこふかきつばたかな

足繁く、雲もひっきりなしに通る沢の水を、杜若の花さえも垣を作つて囲っているよ。

▽すみわびてかこひすててしかきつばたさかゆる宿の春にさかなん

住みづらくなつてかこい捨ててしまった杜若は、栄えている宿の春に咲いてほしいものだ。

▲池にさくただ一むらのかきつばたたれふたあゐの色に染めけん

池に咲くただ一群の杜若を、誰が二藍の色に染めたのだろうか。

▼うらめしやたががよひけるかきつばた宮こへだてて春もへぬらん

恨めしいことだ。誰が通つた垣の杜若なのか、都を隔てて、春も過ぎてしまった。

「藤」

□ひとしほのみどりのほかも色やそふ花咲く春の藤しろの松深い緑の他に一入色を添えるのであろうか。花咲く春の、藤がかかる藤代の松よ。

※「ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり」〔古今集〕春上・二四・寛平御時きさいの宮の歌合によめる・源宗子

△いつはりをかけてしらなんはなに咲く藤をも浪と人はいふなり

偽りか真実かを神かけて、知つてほしい。花に咲く藤のこと、人は浪というようだ。

▽神がきにいのりかけてしふちなれば春の末まで色やまさらん神に祈りをかけた藤の花なので、春の末までも色がまさっているだろう。

※「ゆく春とともにたちぬるふなみちを祈りかけたるふちなみの花」〔後拾遺集〕別・四六八・三月ばかりに筑後

守藤原為正国に下り侍りけるに、扇たまはすとてふぢの枝つくりたるに結びつけて侍りける・選子内親王

「いのりつつちよをかけたるふぢなみにいきの松こそ思ひやらるれ」〔同・四六九・かへし・藤原為正〕

▲尋ねばやむかしのやどに立ちかへりわがみしまの春のふぢ

なみ

尋ねたいものだ、昔の宿に立ち返って、私がみたままの春の藤浪を。

▼かすが山かすみのよそに遠けれど心にかかる松のふちなみ
春日山は、霞をへだてて遠いけれども、心には松の藤浪のことが気にかかっている。

※春日大社の祭神（藤原氏の守護神）が、自分を守ってくれるか気にかかる、という歌。

「款冬」

□やまぶきの花も程なくうつりけり春くれぬとはいはぬ色にて
山吹の花も、あつという間に散ってしまった。春が暮れたとは言わない、くちなし色をして。

△いかばかりなげとかしるくちなしに物こそいはね山ぶきの花
どれほど嘆くと知っているのか、くちなし色に咲いて、ものを言わない山吹の花よ。

※「あふことのとどこほるまはいかばかりみにしみてさへ
なげとかしる」（『後拾遺集』恋一・六三〇・人のこほりをつつみて、みにしみてなどいひてはべりければ・馬内侍）

▽くちなしにいはぬ思ひもあらはれてひらけにけりな山ぶきの花
口がなく、言わない思ひもおもてに表れて、口を開け、くちなし色に咲いた山吹の花よ。

▲まがきまで染めかけてけり山ぶきの花色衣春の名ごりに

垣根まで染め掛けた山吹の花の色の衣は、春のなごりの存在だ。

※「山吹の花色衣ぬしや誰と問へどこたへずくちなしにして」（『古今集』誹諧歌・一〇一二・素性法師）

▼春深き色こそまれ谷川の浪のかざしの山ぶきの花

春が深まった気配もまさる、谷川の波のかんざしの山吹の花。「三月尽」

□花鳥の名残も夢になしはててうつくほどなく春ぞくれぬ

花鳥の名残もすっかり夢になってしまつて、うつつには、あつという間に春が暮れてしまつた。

※注2・稻田氏のご論では、第四句「うつつ」とする。

△霞だに立ちとまれかしおしむとはとしどし春も思ひしるらん霞でさえも立ち止まつてほしいものだ、私が春がゆくことを惜しむと、年々、春もわかつてくれるだろう。

▽いかがせんうきにわすれてをのづからなくさむ花の春もくれなば
どうしたら良いのか、つらさを忘れて、自然に心が慰む花咲く春も暮れてしまつたならば。

※題「暮春」

▲おしむぞよあづまの方に来てもまたことしみとせのはるのわけを
惜しむことだ、東国に来てもまた、今年で三年になる春との別れを。

▼つれなくてくれゆく春は花とりのなごり有明の月もとまらず
素っ気なくて、暮れていく春は、花や鳥の名残りも惜しいの

に、それに加えて有明の月もとどまらないで行ってしまう。

注1

島津忠夫「安嘉門院四条五百首と十六夜日記」『国語国文』第31巻1号、一九六二年一月。のち、島津「和歌文学史の研究——和歌編——」(角川書店、一九九七年)に収載。

2

稲田利徳「いま一本の『阿仏尼詠五百首』の伝本について」『和歌史研究会会報』第31・32合併号、一九六八年十一月。

3

田辺「『安嘉門院四条五百首』について——『十六夜日記』との関わりを中心に——」『和歌文学研究』第75号、一九九七年十二月。

4

森井信子「安嘉門院四条五百首について」『鶴見日本文学』一九九八年三月。

(本学大学院博士課程)